

ピリジンの発がん性の表記について

詳細リスク評価書（案）	初期リスク評価書（平成 30 年 1 月）
<p>○ヒトに対しておそらく発がん性がある。</p> <p>根拠：<u>動物試験で十分な証拠がある。IARC は、GLP に準拠した飲水実験において、B6C3F1 マウス雌雄での肝細胞腺腫、肝細胞がん及び肝芽腫、F344/N ラット雄での腎尿細管腺腫、腎尿細管腺腫あるいは腎尿細管腫瘍癌（併発）、F344/N ラット雌での単核細胞白血病、Wistar ラット雄での精巣細胞腺腫の発生率が有意に増加した。皮下注射における F344 ラット雌雄での結果は否定的であった。また給餌投与や皮膚塗布におけるトラスジェニックマウスでの結果も否定的であった。なお、ピリジンにばく露された労働者に関する小規模コホート研究において、肺がんあるいは併発するすべてのがんにおける死亡率の増加は示されなかった。扁平上皮がんが 6 例観察されたとの報告はあるが、発がんリスクの記載がなかった。ヒトでの発がん性の証拠は不十分であるが、実験動物での発がん性の十分な証拠があるとして、グループ 2B に分類している。又、ACGIH でも A3（確認された動物発がん性物質ではあるが、ヒトとの関連性は不明である）に分類している。</u></p> <p>（各評価区分） IARC：2B（2019） ACGIH：A3（2004） 産衛学会：2B（2018） DFG MAK：3B（2009） EU CLP：情報なし NTP RoC142th：情報なし US EPA：情報なし</p>	<p>○ヒトに対する発がん性が疑われる</p> <p>根拠：<u>IARC は、発がん性に関するヒトでの明らかなデータはないものの、B6C3F1 マウス雌雄での肝細胞がん及び肝芽腫、F344 ラット雄での腎細胞腺腫あるいは腎細胞癌（合計）および雌での単核球性白血病の発生率が有意に増加したことから sufficient evidence と判断し、機序からも発がん性が否定できないため Group 2B としている。また、ACGIH でも A3（確認された動物発がん性物質ではあるが、ヒトとの関連性は不明である）に分類している。</u></p> <p>（各評価区分） IARC：2B（2017） ACGIH：A3（2004） 産衛学会：情報なし DFG MAK：3B（2009） EU CLP：情報なし NTP RoC12th：情報なし</p>